

と畜検査でみられた豚の脾臓及び大網の縦隔転位の一例

○ 大西 栄二、安藤 友美

辻 泰司、今川 哲

【はじめに】と畜検査で遭遇する豚の脾臓の奇形として、重複脾が広く知られている。今回、脾臓及び大網の縦隔転位がみられた豚を発見し、肉眼的観察を実施したので、その概要について報告する。

【症例】豚（雑種）、性別不明、6ヶ月齢、香川県内の農家から一般畜として搬入され、生体検査で異常は認められなかった。

縦隔転位がみられた脾臓及び大網は、縦隔胸膜下に 20 cm×10 cmの白色腫瘤として認められた。

大網は縦隔胸膜と後大動脈側、心臓側、横隔膜側で癒着がみられた。また、縦隔胸膜を右側肺間膜の走行とほぼ平行に切開した際、脾臓の壁側面の背側端付近が切開されたことから、脾臓は壁側面を背側、臓側面を腹側に位置していたものと思われる。

横隔膜を臓側面から観察したところ、食道裂孔は食道の腹側に 3 cm×3 cmの開口部分を有しており、大網と脾臓は食道裂孔の開口部分で腹腔と連絡していた。

胸腔内における後大動脈、食道、後大静脈の背側からみた配置は正常であったが、大網と脾臓が食道と後大静脈の間に位置していたことにより、食道と後大静脈の間に大きな間隙がみられた。なお、右心房への連絡部分は肺門の腹側から行われていた。

大網と脾臓を摘出して観察したところ、肉眼的構造に異常は認められなかった。

脾臓の血管走行について観察したところ、脾門に沿って血管の走行が認められ、動脈、静脈が一对となっていた。さらに、脾門に沿って走行する血管から分枝したものと思われる一对の動脈、静脈が観察された。

【考察】大網は、網囊の原基となる背側胃間膜が拡張したものであり、脾臓は背側胃間膜の拡張により発生した、大網の浅壁の中に発生する。

背側胃間膜は、正常な発生では、胃の左側方向への回転運動に続いて、最初は後方へ、そして左側方向へ拡張するが、本例では大網が縦隔内にみられたことから、背側胃間膜は前方に拡張して大網となり、そこに脾臓が発生したものと考えられる。